

國學院大學學術情報リポジトリ

〔談話室〕 〈強調〉の正体に迫る

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菊地, 康人, Kikuchi, Yasuto メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000173

《強調》の正体に迫る

菊地康人

文法学者も語学教授者も好むことばに《強調》がある。「これは《強調》の表現です」という説明が、英語など諸言語の文法書にも、日本語教育にも、よく登場する。日本語の古典文法また然り。

例えば英語の「It is…… that」は「強調構文」だという。It の後の語が強調され、日本語なら「～のは……です。」が対応すると習う。この「～のは……です。」は、日本語教育でも学習項目の一つであり、英語の「強調構文」に倣ってか、「です」の前の……が強調されるとしばしば説明されている。

実際にそう教えると、学習者はわかったという顔をする。だが、実は、この教え方では、学習者は適切には使えない。例えば、A 子さんに対して「私が好きなのは A 子さんです。」と言う、といったことが起こる。A 子さんを愛してやまない気持ちを強調したくて、《強調》と教わったこの言い方を使ったわけだが、この言い方は彼の気持ちを伝えるのにふさわしいだろうか。「私が好きなのは A 子さんです。」は、実は、例えば「あなた、ほんとに B 子のことが好きなんですよ?」と言われ、「違います! 私が好きなのは A 子さんです。」と言う、といったときに使うのがふさわしい。つまり、「～のは……です。」は、「です」の前の……として、他のものがそこに入るのではないかという見方を相手がしている状況で（または、そこに何が入るのかわからないという状況で）、そこに該当するのは……です、と述べたい場合の表現なのである。学習者にはこれを教える必要がある。推測されている内容の一部を正しく補う情報を提示する言い方、とでもいうほうが当たっていて、その情報の重要性が際立つ面はあるにせよ、《強調》という性質の表現ではない。英語の「強調構文」も同様のミスリーディングな名づけである。

《強調》という言い方が一応当たっている場合でも、いろいろな《強調》がある。「いろいろ」の例の一部として、程度の強調（「涙が出るほど」）、重要性の強調（「とりわけ」）、真実性の強調（「間違いなく」）、排他性の強調（「ほかから

ぬ」、意外性等の演出効果の強化（「なんと」などとあげられようが、こうした特化した強調よりも、「怒ってなんかいいよ、本当に」のように〈主張度〉を上げて述べる、とでもいうタイプ（この名づけは本学院生の山本楓氏から借りた）のほうが、強調の名にふさわしい。もつと単純に「ここに目を向けてくれ！」とアピールする強調もある。例えば会食で使った店が好評だったとき、幹事が「私が見つけたんです！」と言え、そうしたアピールである。

ところで、この「私が見つけたんです！」を、助詞「が」に〈強調〉の働きがあるのだと、文法学者や日本語教授者はしばしば説明する。だが、例えば「実際に歩いて見つけたんです！」も同様のアピールが感じられるが、これを「歩いて」の「て」の〈強調〉の働きだとは誰も言わない。だとすると「が」の〈強調〉も怪しくないか。この「が」は、「誰が」ということに関心が向いている（あるいは、そこに関心を向きたい）状況で、その答を提示するのが機能である。その名詞に目を向けることにはなるが、別に〈強調〉が機能ではない。「が」による〈強調〉と安易に言うことには慎重でありたい。そしてまた〈強調〉と教えるだけでは、学習者はこの種の「が」の使い方をそれほどは習得できない。「こそ」が〈強調〉だと習うと、「私こそ頑張ります！」と言って強い決意表明をしたつもりになる学習者がいる。「こそ」はどんな〈強調〉かを教える必要がある。「こそ」にはいくつか用法があるが、「XこそY」の中核的な用法は〈XとYが結びつくことに注意が向けられていない状況で、XとYが結びつくことをアピールするときに使う〉ことなのではないかと私は見ている。「語彙を増やすより、基礎的な語を使いこなすことこそ上達への道です。」のような例が典型例で、「XとYの結びつきへの強い注意喚起」の働きである。単純な〈強調〉ではない。

〈強調〉ということばは、文法研究でも語学教育でも心地よい。説明する側もされる側もわかった気になるからである。が、心地よさは時に危うい。麻葉がそうであるように。ある時以後、私は文法学者としても語学教師としても〈強調〉ということばは使うまいと決めた。〈強調〉の表現だと言つても、文法研究では真理の探究にならないし、語学教育では学習者が適切に使えないからである。文法学者も語学教師も〈強調〉と言つて済ませるのは、それ以上の説明ができない敗北宣言と同じなのではないか。ただ、そうは言つても、「勝利」は結構難しい。〈強調〉の正体・本質を捉えた説明をその表現ごとに与えなければならぬ。それを見抜く難しさである。だが、ここまでしないと本物ではないし、これと向き合うのは、大変ではあるが、ことばの奥深さを感じる嬉しい謎解きでもある。

（日本語学・日本語教育学）